

悪の秘密結社と一緒に

C—K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界をふらふらと彷徨う主人公がある世界にたどり着いたとき、そこで出会ったのは滅亡寸前の悪の組織の首領だった。思い付きと気まぐれで彼らに肩入れすることを決め、やがて顧問的な役職を頂戴する。

だが、何の因果かその星へ、悪の組織がどんどん集結していく事態に。

(その昔、某所に上げたお話のリメイク版です)

基本、ヒーローをぼこぼこにします。

目次

1話	黒山羊さんと一緒	1
2話	黒山羊さんと一緒②	12
3話	黒山羊さんと一緒③	20
4話	即身仏と一緒	28

1話 黒山羊さんと一緒

Q、目が覚めたら、黒山羊の顔がドアップで迫っています。どうしますか？

- ①：悲鳴を上げる。
- ②：気絶する。
- ③：殴る。

彼女が選択したのは①と③だった。

「いやあああああっ!!」

裂帛の気合に近い悲鳴と共に繰り出されたメガトンパンチ（比喻にあらず）が、黒山羊を車田正美画ばりに吹き飛ばす。

一拍を置いて地面へドチャリと落下した黒山羊は、逆さまのまま彼女へサムズアップを送り、

『い……良い、……拳じゃ、嬢、ちゃ……ん』

とだけ言つてパタリと倒れた。

彼女が我に返ったのは周囲で固まっていた猫頭や犬頭の戦闘員が『にやにやー!?!』『わおー!?!』と黒山羊に駆け寄り、山猫怪人が『しゅ、首領さまーっ!?!』と悲鳴を上げた後であった。

「あれ？」



「咄嗟の事とはいえ、誠に申し訳ありませんでした」

場が落ち着いて彼女がしたことは誠心誠意の籠もった土下座である。

未だ警戒心バリバリに彼女を威嚇する山猫怪人以下戦闘員とは裏腹に、サバトで崇められる黒山羊の姿そのものの首領は困惑していた。

「のう、嬢ちゃん。ワシ等が怖くないのかい？」

普通の人間がこの異様な集団と対面すれば恐怖で錯乱するか、悲鳴を上げて逃げまどうか。はたまた涙と鼻水を流しながら泣き叫んで命乞いをするかだろう。正にそのような経験を持つ彼等は、平然と、

気にせずに対峙する茶色いブレザー姿の彼女に困惑するしかない。

「言葉が通じるなら姿形に偏見はないですね。今までの経験から言うて」

「ずいぶん波乱万丈な人生を送つとるんじやのう……」

自分たちの経緯さえも受け入れるとも捉えられ、苦笑するしかない黒山羊首領であった。

「自己紹介がまだでした。私は椿・櫻ツバキサクラと言います。助けて頂いてあげてくださいました」

戦闘員や怪人に臆することなく、それでいてきちんと礼を尽くす姿に戸惑いを隠せない悪の秘密結社サイド。

たまたま周囲を哨戒していた怪人が近くの砂浜に倒れていた彼女を拾い、今更だと思いつつも介抱することを選択し、隠れ家へ連れ帰っただけだ。彼等も風前の灯なので、彼女を利用するほど潤沢な物資があるわけでもない。

「……ところでここは何処でしょう？」

「なんの変哲もない寂れた岩山の隠れ家じゃな」

岩山をくり抜き、かつては何かの施設があったような跡があちこちに見える。時折、遠くからかすかな潮騒の音が聞こえてくる以外は静かなものだ。

「ええと、首領さまたち？　はここで何を生業にしているんですか？」
「ミューガスという悪の秘密結社を率いておったのじゃがな……」

黒山羊首領が口惜しやと歯を食いしばる姿に、「悪の……？」と首を傾げる椿・櫻。悪の組織が倒れていた17歳位の女性を人質や改造人間にせず、ただ介抱するだけとは普通に疑問を持つだろう。

まあ、彼女の疑問をよそに説明は続く。

彼等ミューガスは太古の昔から星（地球）に君臨してきたらしいのだが、ある時二千年程の休眠期を経たら地上は人間で溢れかえっていたのだそう。星を自然破壊や公害から護るため人類を根絶やしに始めたところ、人類の中から五人の戦士が現れ反撃してきた、とか。一進一退の攻防を一年ぐらい続けて来たが、ついにその均衡は破られ、悪の秘密結社ミューガスは劣勢に立たされたところである。

「ぐうつ、し、神官さまがたはお倒れになりつ、ぐすつ。わ、わたしはつ……、しよ、將軍さまと首領さまを、お守りしながらつ……」

(……うわぁ……)

途中から説明が涙と鼻水まみれの山猫怪人に変わり、黒山羊首領さまが「泣くのではない。お前はよくやつてくれておるぞ」と頭を撫でながら慰めてる図が展開されていた。どう読めば分からない空気に顔を引きつらせ、口を挟まないように心掛けるしかない。

「なんだいなんだい、またやつてるのかい山猫の。いい加減腹を括りなよ」

ふと他とは別の気配を感じて振り返ると、戦闘員が背筋を伸ばして迎えるオレンジ色の怪人がやって来ていた。

この人が將軍さまかなと、姿と貫禄に納得する。頭と両肩と胸に獅子の顔を持つ怪人は、椿・櫻が平然と佇んでいるのを見て、目を丸くしていた。

「どうも」

「おや、豪胆な嬢ちゃんだねえ。忠告しとくところはもう直ぐ戦場になる。とつとと逃げな」

その発言で首領以下、山猫怪人と戦闘員たちに緊張が走る。

「……来たか」

「はい」

首領の前で膝をつく獅子將軍は今まで偵察に出ていたようで、すぐ近くまで戦隊の者たちが迫っていること、完全にこちらの居場所を掴んでいるらしいことを告げる。

「くくくくソガアアアアツ!!」

「あ……」

いきなり激昂し、飛び出し始めて行く山猫怪人。子を愛おしむ母のような目でそれを見送る首領。その後について戦闘員たちも雄叫びを上げながら走っていく。

「行っちゃいましたね」

「ここで我等の命運も終わりなのかもしれぬ……」

悲壮感を眩きながら立ち上がる黒山羊首領と獅子將軍。

しかし、その表情には晴れ晴れしたのも混じっている。

「嬢ちゃんは素早くここを離れよ。関係者と思われると厄介じゃぞ」

「あっち側をずっと行くと山の方に出るさ。南に行けば街がある。迷うんじゃないよ」

それを別れの挨拶とし、背中を向けて去って行く2人。

「うわ、なんかカッコイイ」

何かの映画のラストシーンのような印象について感動する椿・櫻。ヒーローに最後の戦いを挑む悪の組織の立場という注釈が付くが。

ひとりその場に残された彼女は立ち上がり、入り口？ に向けて思案する。

『どうなさいますか？』

「分かってて訊いてるでしょ」

ここには居ない第三者の声が響く。ゆっくりと彼等が去った方に歩きながら、彼女は楽しそうにその声に返した。

「どうやらここも地球らしいけど。最初に会ったんだ、これも何かの縁でしょう。それに……」

『それに？』

「この私を助けた礼をまだ受け取って貰ってないわ」

『たしかに。この借りは大きいですね』

囁くような笑い声が空洞に木霊する。微かな光に彼女の影が岩肌にも長く伸びていく。その影からは無数の空虚な瞳が輝いていた。

◇

彼女が周囲を見渡せる海岸に辿り着いた時、初期戦闘はほぼ終了していた。

戦闘員たちは砂浜や波打ち際に倒れ伏し、山猫怪人も弱々しく片膝を付いている。その後方に獅子將軍と黒山羊首領がいて、胸を張り山猫怪人の最期を見届けようとしていた。

彼等に対するヒーロー側は、赤・青・黄・白・桃・金色のスーツを

身に纏った6人の戦士。剣呑な光をそれぞれが持った銃口に集め、声を合わせて必殺技を山猫怪人に向かって発射した。

直撃のちに大爆発となるはずが、6つの光は山猫怪人の直前で何か
に阻まれ停止した。

「「「なにイツツ?!?!」「」」」

「なんじゃと!？」

「嬢ちゃんっ!？」

「お、お前っ!？」

割り込んだのは椿・櫻。

彼女は空中に停止した6つの光を、指先でペンの如くクルクル回しながら呆れたように呟いた。

「困るんだよねえ。人の恩人を勝手に殺したりしたら。こちとらまだ恩も返してないんだから」

ヒーローと悪の組織の戦いに割り込むブレザー姿の女子高生。例えるなら特撮撮影現場に迷い込んだシチュエーション。ものすごい場違い感である。

「な、なんなんだキミは!？」

赤のヒーローが泡食ったように叫ぶが、それを完全無視。「返すよ」とだけ告げて、指先にあつた6色の光弾を戦隊ヒーローに投擲。6色の爆発が海岸を彩り、それぞれが宙を飛び、地面へ叩きつけられる。「うわああああ——っ!」

痛みへのた打ち回る戦隊ヒーローを視線から外し、後ろを振り返る椿・櫻。

「……お前、なんで……?？」

そこへ駆け寄る黒山羊首領と獅子將軍。將軍に肩を貸してもらい立ち上がった山猫怪人が真っ先に疑問を投げかけた。

「えー、今言ったじゃないですか。助けて貰った恩を返してないって」「お前さん分かってるんだろうね。相手はこの正義の味方なんだよ。他の人類に後ろ指指されるのはアンタなんだよ」

「ご忠告どーも。でも私、反逆者っていうのも嫌いじゃないです、よっ

と！」

「なぐあつ!?!」

椿・櫻が何も無い空中を回し蹴った途端に姿を現しながら吹き飛ぶ金のヒーロー。そこに至るまで獅子将軍も黒山羊首領も山猫怪人も存在に気付かなかつたため、目を白黒させている。

一番驚愕しているのは、迎撃された金のヒーローだろう。

「甘い甘い。私の不意を付きたいなら、心音を止め体温を無くし質量をゼロにした挙げ句、空気の流れを起こさないで忍び寄りなさい」

顔の前でチツチツチツと指先を振りながら不敵に笑う椿・櫻。実際彼女へ近付くには音や温度や動態センサーに引っかかってしまえばアウトである。人の身でそんなものは不可能な訳で。

白と青のヒーローが体を起こしながら銃口を椿・櫻へと向けるが、トリガーをカチカチ鳴らす音が虚しく響くだけ。

「なっ、なんでえっ!?!」

「何故撃てない!?!」

「うふふふ」

簡単に種明かしはしてやらない。

無様な姿を笑ってやるだけである。

「お三方共少々下がっててください。後は私が仇をとってあげます」
「なに者なんじやお嬢さん……」

黒山羊首領たちに下がってもらい、笑みを浮かべたまま進み出る。目の前にいるにも関わらず、彼女の得体のしれなさを感じ取った戦隊ヒーローたちは一歩下がった。

「ふむ」

「なっ!?!」「ええっ!?!」「なんでっ!?!」

ついでと彼女が上げた片手へ、ヒーローたちの手元から武装が勝手に離れて飛んで行く。呆然とする敵味方を尻目に、彼女は銃形態や剣形態となった武装を弄くり回す。

「なるほど、これなら使えるかな」

眩きと同時に彼女を中心とした地面に巨大な魔法陣が展開された。何だか判らないため、慌ててその範囲内から飛び退くヒーローたちと

悪の三人。範囲内にいるのは椿・櫻と倒れ伏した戦闘員たちになる。

空中に浮いたままの6個の武装から光る帯、エネルギーとなるべきものが陣へ流れ込み、魔法陣とその上に横たわる戦闘員たちが7色の光に彩られる。数秒ののち光が収まると、倒れ伏していた戦闘員たちがフラフラつと起き上がった。

「あなたたちはあっち」

椿・櫻が幽鬼のような戦闘員たちに告げると、フラフラしながら後ろで固まっていた首領の下へと向かう。

「お……おお、お、お前たち……」

目尻に光るものを溜めながら黒山羊首領と獅子將軍が彼等を迎え入れる。

山猫怪人は後ろを振り返っていた椿・櫻の向こう側、ヒーローたちの動向を見るや否や彼女に叫んだ。

「おい前を見ろ！ 油断すんなっ！」

「？」

ヒーローたちは劣勢もなんのそのといった態度で立ち上がり、赤のヒーローが口元に上げていた左腕を下ろしたところだった。

「クソっ！ 姿形に惑わされたぜ！」

「まさか奴らの奥の手だったなんて……」

「だがもうお前たちの勝手にはさせせん！」

「俺たちの力を見るがいい！」

奥の手どころかまったくの赤の他人なのだが、好き勝手に悪態を吐くヒーローたち。

やがて空の向こうから全長40mはあろうかという飛行機が飛来した。空中で3機に分離して再び合体した飛行機は、巨大ロボットへと姿を変え地上に着地した。

「自分の首を自分で絞めてるとしか思えないなあ」

『搭乗！』と叫んでロボットの足元へ走っていく6人を呆れた表情で見送る。その際には背後から聞こえてくる「もうダメだー！」とか「どどどーすんだいあれ！」とか「騒ぐんでない！」とか言ってる3人は放置だ。

◇

巨大ロボットの胸のコクピット乗り込んだヒーローたち。

すし詰め状態の6人は手早く起動チェックを済ませ、コクピットの中央で円陣に手を合わせた。

「最後の一戦だぞ」

「「「「おお（ええ）！」「」」」」

「最後のあの女が気になるけど」

「これでやつと平和が訪れる！」

「これも今までの皆の協力があってこそだ」

「最後だからといって気を抜くなよ。行くぞー！」

操縦桿を握り締めた赤ヒーローが勢いよく前に押し込む。直後、高揚感に沸き立っていた彼等に冷水が浴びせられた。

「い、行くぞー！」

ガチャンコガチャンコ操縦桿を押し込むが彼等の最後の希望はうんともすんとも反応しない。

モニターで見下ろせる砂浜に立つだけのあの女は、腕を組み不遜な笑みを浮かべているだけだ。それが更なる不気味さを醸し出している。

『あー、あー。テステス、テステス。マイクのマイクのテストちゅー！?!?!?』

突然コクピット内部に外部音声が響き渡った。通信担当の桃色に全員の視線が集中するが、彼女は「何もやってないわ！」と首を振って疑惑を否定する。

『ハイハイその往生際の悪いヒーローさんたち、仲間割れはみつともないよー』

脇から割り込んだ青色が通信スイッチをOFFにするが、機械はONから表示が変わることはない。

「なんだこりやどーなってやがる！」

「判らないわよっ！」

各自が手元のコンソールを操作するが、何ひとつ彼等の指示を受け

入れてはくれない。たちまちコクピット内部は怒号と悲鳴に満たされる。

『あなたたちには弁護士を呼ぶ権利はありません。そこから出てなぶり殺しにされるか、その中でなぶり殺しにされるか選んで下さい。まあこの場合は定番で、小便は済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋、じゃなくてコクピットの隅でガタガタ震えてする命乞いの準備はオーケー？ って言っても命乞いをするだけ無駄だけどね。アハハハハハッ』

外部からの声は勝手なことをのたまうばかりだが、彼等の絶望感を煽るには丁度いい。焦燥感に駆られ、狭い中で機器類を操作し、どれも反応しないという現実を突き付けられて悲鳴をあげるのを繰り返す。

「なんでっ！ なんでなのよっ！ あなたも人間でしよう、奴らに酷い目にあわせられた経験だってあるはずでしょう！」

「そうだ！ なんで奴らに協力するんだ！ この人類の面汚しめ！」

白と青の血を吐くような訴えにスピーカーの向こう側は一瞬沈黙する、が。

『うふ、うふふふふふ。人類の面汚し？ 人間のくせに？ それ私は私がこの世界の人間であればの話よねえ』

あつさり告げられた衝撃の告白。

しかしスピーカー越しだというのにその声は、背中に針を突き入れるようなおぞましさに満ちていた。

『右も左も分からぬ世界で山猫怪人さんに助けられ、首領さまたちに優しくされて、恩義を感じないなんてあるものですか』

だからお前たちと敵対する。

彼女はあつけらかなとそう告げた。

「クソクソクソオオオッ！ お前みたいな小娘が正当性を主張すんじゃないええっ！」

「他人の世界に手を出さないでよ！ とつとと帰って！」

いまだに操縦桿を握り締めながら赤が絶叫する。半泣きになりながら桃も悲鳴のような感情を吐露するが、相手には馬耳東風だ。つい

でとばかりに右手を上げて指を鳴らす。

いったい何の真似かという疑問は、突如コクピットを襲った振動で更なる驚愕にかき消された。

「な、ななななん、なんだこの揺れはっ!？」

「あ、あああ、あれっ! あれあれアレッ!!？」

椅子から投げ出されそうになったため手短なコンソールにしがみつく金。同じく椅子の背にしがみついた黄色が金切り声をあげてモニターを指差した。

コクピット内部のヒーローたちが縦揺れ横揺れに翻弄されながら見たものは、搭乗している巨大ロボットの腕が自身の胸部を強打している光景であった。モニターがノイズで一瞬のブラックアウトを繰り返しつつ、垣間見える腕がコクピット周辺に膨大な圧力を加えていく。

警告音を発しない機体環境モニターがその異常を表示するだけである。

『あー、言い忘れてたけど。私、機械に対して君臨する側なんだー。科学技術が発展すれば発展するほどその世界は私の王国な訳。だから私に対して銃で攻撃すら出来ないしー。巨大ロボットなんか私の前に出た時点でもう下僕確定ね。私に危害を加えようと考えたらもう、自分のコクピットの中だろーが、製作者だろーがプチツとされるだけなのよねえ』

コクピット内部が絶望で満たされる。

「なんで、なんでなんだよおオオオ！」

「私たちが何をしたって言うのよ！」

『なにをしたってアンタ（笑）』

「私たちはただみんなの笑顔を守りたかっただけなのよう！」

「なんでお前なんかが現れるんだよっ!？ 俺たちの幸せを返せよ！」

6人がスーツのヘルメット内で顔色を無くし、ただ無様に泣き叫ぶだけ。脱出装置も働かないので彼等が出来る自由はそれだけしかないから。

巨大ロボットを呼び出した時点で彼等は自分たちの死刑執行書に

サインを入れたのも当然だと言うのだから。しかも現在進行形で彼等の死刑執行を行っているのは搭乗しているロボットである。

椿・櫻の手にある携帯電話から聞こえてくる声が悲鳴からすすり泣く声に変わり、やがて内部機構の破損する音と共に断末魔もすらも断ち切れた。

携帯電話をポケットにしまい、自分の胸を叩くのを止めた巨大ロボットを見る。

大きくへこんだ胸部中央付近は装甲に亀裂が入り、一部内装機関が見えている。コクピットがあった場所からは白い煙が立ち上っているが、動くのに支障は無いようだ。大人しく主の命令を待っている。

「状況終了。こんなもんでどう、で……すす？」

後ろを振り返った彼女が見たものは、上下関係などを感じさせぬ秘密結社の首領将軍怪人戦闘員が固まって震えている図であった。

2話 黒山羊さんと一緒②

「あの、皆さん……。どうしてそんな格好で固まっているんですか？」
「アンタの方がよっぽど恐ろしく見えるからだよっ！」

おそるおそる尋ねた椿・櫻に、秘密結社ミューガスの塊から獅子將軍の悲鳴のような返答が飛んで来た。

ポケットから白いハンカチを出した椿・櫻は、ひらひらと振りながら敵意が無いことを表す。

「恩人の方々に危害を加えるようなことはしません」

「ほ、本当だろーね!？」

「天地神明に誓って」

「マジなんだろーね！」

「あと私、何に誓えばいいんですかあ？」

この不毛なやり取りを3回ほど繰り返し、ようやくと信用して貰った彼女はげんなりと肩を落とした。

やりすぎた感はいなめないが、最後の断罪などは彼女が実行した訳ではない。実行にGOサインを出したのは否定しないけれど、あんなことは行使出来る権限のほんの表面程度なのだ。

これ以上疲れる会話をしたくないので追々知ってもらおうと先送りにした。

まずはミューガスの立て直しが先になる。

聞いてみたところ、本拠地は瓦礫と化し地の底に埋まってしまったらしい。あと人員も足りない。

山猫怪人が涙ながらに語った神官というのは、贅と儀式によって黒山羊首領が生み出せるらしい。

將軍格は一度怪人を造り、幾らか経験を積ませた上で昇格させるらしいのだが、この儀式にも神官が必要とのこと。

「なにはともあれ、まずは仮拠点と神官みたいですねー」

「そうじゃな。神官を生み出すにしても贅は必要じゃし、場も整えねばならん」

椿・櫻のベホイミ一発で怪我と疲労を回復した山猫怪人は、獅子將軍と戦闘員たちと周辺の警戒をしている。頭を突き合わせて会議をしているのは彼女と首領だけだ。

どうやら頭脳労働系の狐將軍と、技量系の騎士型鹿將軍は倒されてしまい、残ったのがパワー系の獅子將軍だけだとか。

『場』ですか……。それはもしかして凄惨な殺人現場系、の？』

「うむ、話が早くて助かるな。その通りじゃ」

要するに大量の血が流れた場所であればいいとの回答に椿・櫻は悩む。

こちらの『地球』が彼女のいたところとほぼ同じであれば、『場』の特定はたやすい。しかし、こうやって会議をしながらこの星のオンラインにアクセスして情報収集を同時にこなしていても、彼女の知るどの『地球』とも違うところが多々ある。

よって導き出される回答はひとつ。

「なら、作るしかありませんねー。1ヶ所仮拠点によさそうなところもあるようですし」

「む、嬢ちゃんはこの星には疎いんではなかったのかの？」

ヒーローたちを倒す際の会話は隠すことなどないので、ミューガスの人たちにも聞いて貰っていた。そのことを指摘されたが、彼女にとっては既に問題にならない話だ。

巨大ロボットが製作出来るような科学力がある星ならば、彼女がネットに接触したが最後である。ちよつと考えただけでネットに接続された情報機関から膨大なデータが流れ込んでくる。事柄や場所や条件等を知るのに支障はない。

『場』についても必要条件を満たす情報は得られたのだが、そのほとんどが遠距離か海を渡った所なので却下した。

「とりあえず移動しましょう。ちよつとそこのポンコツー！」

手招きして呼べば、今まで微動だにしなかったヒーローの巨大ロボットがガシーンガシーンと近付いてきた。山猫怪人等が恐れおののくのを横目で見ながら、巨大ロボットへ指示を出す。

「アナタの発進して来た基地に案内なさい。出来るわね？」

椿・櫻の問い掛けにゆっくり頷き返し、しやがみ込んで両手を砂浜に差し出す巨大ロボット。おっかなびっくりなミューガス一同の背中を押して掌に乗せ、巨大ロボットは海岸線を北に向かって歩き出した。

◇

「ぐえっプ、うぐぐ……」

「へえ、怪人にも三半規管ってあったんだ」

巨大ロボットの手のひらの上で揺られること30分。真つ先に山猫怪人が車酔いならぬ手のひら酔いにグロッキーになっていた。

「見苦しくてすまないねえ……」

「まあ、こればかりは体質ってのもあるもんねー」

ロボットの左手の親指付近で息も絶え絶えになりながら、戦闘員に背中をさすって貰ったり、氷水で首筋を冷やされたりしてる。氷は椿・櫻が魔法で生成したものだ。

「にしても魔術？　まで使えるとはねえ。敵はいないんじゃないかい？」

右手側に円形に座っているのは椿・櫻と獅子將軍と黒山羊首領だけだ。関心したような獅子將軍に肩をすくめる。

「地力だけで接近戦しろと言われたら厳しいですねー」

「それでも山猫怪人^あには余裕で勝てそうじゃな」

陸に上がった鯉のような風体を晒す山猫怪人にため息を漏らす首領と將軍、それに苦笑いの椿・櫻が加わる。

「まあ、ひと口に生身の人間と言っても色んな人がいますからねー。中には数秒間だけ音速を越え、防御を通して内側から相手を叩き斬る剣士とか……」

「そりゃホントに人間かい？」

「10数階建てのビルを蹴り飛ばしたり、斬ったり、粉々に砕いたりする格闘家の人たちとか……」

「それこそ物語などに記されるじゃろう？」

絵物語だと一蹴した2人だったが、椿・櫻が否定もせず肯定もせず

に苦笑したままだったので目を剥いた。

この世界ではなく、別の世界で出会ったことのある冗談のような本当の人々であるからに。

「——、という訳なのじゃ」

「へー。でもだつたらそれはあれでしょ、——」

ミューガスの内情だったり、椿・櫻のこの世界に来た理由だったり情報を交換していると、巨大ロボットは海岸線沿いの市街地に足を踏み入れていた。

街のあちこちから隠れた人々の視線がこちらに集中してるのが感じられる。中にはビルの上やベランダに固まり、こちらを指差して騒いでいる者まで確認できた。

聴覚を強化すれば「裏切り者」やら「役立たず」、「悪に下った面汚し」等の悪口が聞こえてくる。

全て椿・櫻に向けられたのではなく、民衆はまだヒーローたちが巨大ロボットを操っていると思っっているようだ。

「戦ってもらっていたクセに胸糞悪い連中さね」

獅子将軍が心底嫌そうに呟けば、首領や戦闘員たちすらも似たような反応だ。

「む、何が来おつたぞ」

市街地の向こうから4つの影が上空に上がったと思つたら、空に響き渡る爆音を轟かせてこちらへ接近してきた。

「戦闘用ヘリコプターですかねえ？」

2人乗りのキャノピーが特徴的な4機の黒緑色のヘリコプターは、巨大ロボットの周囲を取り囲み、一定の距離を空けて飛んでいた。

この時は通信で巨大ロボット内部に呼び掛けていたのだが、コクピットは潰れているので通じる訳がない。おまけにそれが聞こえていたのは椿・櫻だけだった。

そんなこととは知らないミューガス側は「気にいらねえ」と呟

合って撃破しあおうという時に、考え込んでいた椿・櫻が待ったを掛けた。

「どうしたというのじゃ。まさか情けをかけるというのではあるまいな？」

「違います違います。もう少し効果的な使い方をしましょう。放っておくとまたこういうのがやってきて、その都度同士撃ちをさせなきゃならないですから」

こういった戦闘用車両になると常時ネットに接続されている訳ではないので、彼女の前まで出て来ないと命令が下しにくい。手っ取り早いのが命令で括った別の車両を軍用基地に突っ込ませることである。伝染病も真っ青な侵食が行われる。

今回は片方を元来た基地に向かわせ、もう片方をこの地域最大の基地へ向かわせた。

下す命令は「自衛隊だか戦闘員だかの人員を全て抹殺せよ」である。

◇

「あれ、なんだか不満げですね？」

中で何か喚いていた操縦士たちに構わず、2機のヘリコプターが北と西に飛びさっていったあとのこと。

巨大ロボットは海岸線沿いに広がる市街地の丘陵地を目指していた。

先程の椿・櫻の下した命令に納得がいかないのか、機嫌が悪くなっていた黒山羊首領に問い掛ける。

「一番最初に我等の理念は説明したと思うが……」

「ああ、公害や自然破壊から星を護るために人類滅亡、ですか？」

「そうじゃ。なぜあやつらにそれを実行させなかつたのかの？」

ピリピリした気配を感じたのか、レイラレイラは山猫怪人たちがいる左手側へ寄る。

「まあ、ぶっちゃけると私の能力だけでは中途半端な文明は管理しきれないからですね」

主な理由は人の手が必要な場所が多すぎるからだ。人が家畜のよ

うにコンピュータに管理される映画みたいな世界ならばそれも有りだろう。

しかし、椿・櫻が手を下してしまうと機械たちは彼女主体の世界にしてしまう。

融通の効かない彼等にミューガスを共に歩む存在だと認識させるには、何か行動を起こすたびに一々注射を入れねばなくなる。そんな面倒極まりないことは彼女もゴメンだ。

後は滅ぼした後に残るものの始末になる。

地上に残る全建造物を壊すには椿・櫻の能力を使えば容易たやすいが、その中に含まれる有害物質や危険物なども一緒くたに粉々にしてしまおうだろう。

中でも核や水爆などが無造作に解放されてしまえば、生物のみならず星に与える影響も莫迦にならない。その辺りの管理のためにも人類の残留は必須であると考えていた。

「あと支配する奴らがないと困る組織もあるんじゃないかな？」

「うむむむ……」

色々調べた結果、現在この惑星上で活動している悪の秘密結社はミューガス込みで3つあった。

ひとつは中国大陸で活動している。こちらはまだあちらの大陸産のヒーローと一進一退の状況のようだ。

もうひとつはアメリカ大陸で活動を始めたばかりの組織である。

人類の行く末を決めるには、最低でも3つの組織の首領格による三者会談でも開くまでは保留、ということになるだろう。

「ッ……、分かった分かった。お嬢ちゃんの考えで行くことにしようぞ」

「他にも……」と並べ立てようとした椿・櫻を遮って、ようやく黒山羊首領は納得してくれた。口を挟む暇もないくらいにたたみかけた椿・櫻に閉口したところもあるかもしれないが。

「良かった。実をいうと私も大衆になじられてみたかったですよ」

「妙な趣味をもつとるんじゃない……」

にぱー、と屈託なく笑いヘンテコリンなことを口にする椿・櫻に呆

れる首領であった。

「首領さま、あれを！」

市街地を抜け、自然溢れる丘陵地帯の奥に見えた岩山の壁面がゆつたりと開いているのを、レイラレイラが指差した。山猫怪人は未だにグロッキー状態である。

「まあ、定番なのかな」

「だからさつきからなんなのじゃ？」

納得と疑問の会話をよそに、巨大ロボットは口を開けた格納庫へ足を進めて行った。

3話 黒山羊さんと一緒③

「お待ちしておりました」
「ッ!!?」

背後で格納庫の扉が閉じていき、巨大ロボットの手のひらから降り立った一同。そこに執事服姿の女性が立っていた。

年の頃は20代後半。腰まで伸びた銀の髪は、首の後ろでくくつてあるだけ。茶色系の執事服を着こなしたその体は、スレンダーながら女性らしい膨らみもきちんと有している。美人ではあるがその顔は喜怒哀楽が抜け落ちていて、能面のような無表情からは何も読み取れない。

「やーやーやー。出迎えご苦労ご苦労。……んで首尾は?」
「簡単に、整えておきました」

まるで数年来の主従のように息の合う椿櫻とその女性。

並んでいるところだけを見ると姉妹のようだが。警戒心を継続しながら黒山羊首領が声を掛ける。

「あー……。嬢ちゃんや、知り合いかの?」

「ああ、これは失礼をば。今回みたいな細かいことをやってくれたりする助手です。プログラム構造エネルギー体ですので、人ではないんですけどね」

助手は椿櫻がヒーローの巨大ロボットを解析した時に、通信ログからここへ直接送り込んでおいたものだ。実体化する際のエネルギーは基地から直接ぶん取るので、椿櫻に負担はない。

「それよりも何なんだいこれは……」

目を見開いたレイラレイラが格納庫内を見渡して呟いた。その声色にはかすかな震えも混じっている。

原因は格納庫内のそこかしこにある装飾と、充満する臭いである。

口をかぱつと開け、呆然とする山猫怪人らの背後で膝をついたまま佇む巨大ロボット。それを格納、整備するための空間にはむせかえるような鉄錆てつさびの臭いが漂う。

それは壁に大輪の華の如くべつとりと張り付いていたり、整備用

アームから今も滴り落ちていたり。緊急用電源を備えた車両を赤く染めていたり、何かの缶になみなみと注がれていたり、大半は床にたっぷり貯められている。

元は白黒灰色でまとめられていた格納庫内を凄惨に彩るもの。それは真つ赤な血であった。

「あんたがやったのかい」

「はい。ここだけでなく、基地内ほぼこのような感じですよ」

「注文通りね」

恭しく下げた頭を椿櫻に撫でられ、「恐縮ですよ」という助手。

2人とも人の姿を持ちながら、悪鬼の如き所業とその有り様にミューガス一同に震えが走っていた。

「で、どうですか？ 条件的にここは『場』になりえますか？」

クルリと振り向いた椿櫻の表情には罪悪感などはなく、いたずらつ子が成果を聞いてくるような笑顔だ。「あ、ああ。……充分じゃ」と黒山羊首領が返せば、「やったー」と助手とハイタッチを交わしてみせる。何度も言うが助手の顔は能面のような無表情なので、ちぐはぐなことこの上ない。

「それで贄になりそうなのはこちらですよ」

助手はさらに格納庫内の奥からロープで縛られた10数人を引っぱり出して来る。

全員後ろ手に縛られ、猿ぐつわをさされていた。

半分はこの制服だろうか、薄茶色のワイシャツにタイトスカート着の事務員風の女性。他は油などで薄汚れたツナギ姿の女性数人と白衣の女性とコック姿の女性である。

そしてオマケとばかりに細身の壮年男性が1名。

女性のほとんどは涙目だったり、未だに涙を流したまま目を見開いていたり、放心状態である。この惨状に至った経緯をじかに見れば当然の結果だろう。女性だけを選びすぐって残していれば、私たちの終わる運命が待っていると理解出来そうなものだ。気丈にこちらを睨み付けてくるのは白衣の女性と、壮年男性だけだ。

「うーうー」言いながらもがく壮年男性に目を留めた椿櫻は首を傾

げた。

「なんでこのオジサンだけ残ってるの？」

「ゴイツ確か奴らのボスだったハズだよ。一度だけ見たことがあるさね」

首を傾げた椿櫻の疑問に答えたのはレイラレイラだった。椿櫻の確認を取るようなアイコンタクトに助手は頷く。壮年男性と視線を合わせるようにしゃがんだ椿櫻は、にっこりと小悪魔な笑みを浮かべた。

「こんにちは無能な司令官さん。ご機嫌いかが？」

「もがーっ！ ふがもががっ！」

よほどキツく絞めてあるのか、司令官は口をパクパクさせながら意味不明な叫び声をあげる。その際に涎が垂れるのも構わず、親の仇でも見るような血走った目で椿櫻を睨んでいた。

「うんうん。ヒーローの仇？ そうね。自分たちのロボットに殺されるなんて前代未聞の情けない死に方よね」

「もががっ!？」

「大丈夫よオジサン。アナタの言いたいことは全部丸見えだから。口でする会話なんて不用よ」

「ふぶっ!？」

目を見開いて絶句する司令官。

試すように頭の中で目の前の女に疑問を飛ばせば、小馬鹿にした口調で望む答えが返ってくる。ならばと抗議を含んだ罵詈雑言を飛ばそうとした瞬間、助手のアイアンクローがコメカミを挟み顔を激痛が襲った。

「下らん事を考えるなよ、ゴミクズどもが」

頭蓋骨が粉碎されるような圧力を掛けられ、涙を流しながら脳内で許しを乞う。

「離してあげなさい。そのオジサンの生殺与奪権はミューガスさんにあるのだから」

「……御意」

渋々と殺意を振りまき、名残惜しそうに司令官より離れる助手。

「うふふ、あはは」と楽しそうにくるくる回る椿櫻。

「じゃ、この人たちの処遇は首領さまにお任せ致しますわ」

「それは構わんが嬢ちゃんはどうするんじゃ。見学していくかの?」

哀れな生け贄どもを見渡し、少し思案した椿櫻は首を横に振った。

「結果だけ分かればいいです。私はこのデータベースを漁ってきますね。何かありましたらその辺に呼び掛けて下さい。この基地は掌握したので私に伝わります」

それだけを事務的な口調でミューガスに伝えると、助手を引き連れて楽しそうな足取りでその場を後にした。

◇

助手を伴った椿櫻が格納庫から姿を消したところで、ミューガス一同は大きなため息を吐き、肩から力を抜いた。

「いいのかい、首領さま? あの嬢ちゃんの手を借りたままでさ」

戦闘員たちへ生け贄どもを端にまとめさせたレイラレイラが、黒山羊首領へ声を掛けた。山猫怪人は椿櫻が向かった扉を困った目で見つめている。

「確かに末恐ろしい嬢ちゃんじゃな」

「このまま近辺に置けば寝首をかかれそうで……」

怪人どころか將軍までをも葬り去る6人のヒーローをたつた1人で下してしまい、ミューガスに再興の道を指し示した。

しかもそれが行われてまだ数時間程度しか経っていない。

数時間前に覚悟を決めた自分たちはなんだったのかと自明するばかりである。

どうやら単独ながらその能力は一軍にも匹敵し、科学文明の中では無類の強さを振るえるらしい。味方にいれば頼もしい反面、獅子身中の虫のような感じもある。

「だから排除しろと。そうお前は言うのかい?」

「い、いえっ! 自分はそんなんっ」

見たままの姿に反して、その行動は彼等秘密結社以上に残忍な部分もある。後々を憂えるより今ここで、と零した山猫怪人は首領の厳し

い視線を受けて震え上がった。

「どちらにせよ我等は後には引けん。あの嬢ちゃんをどうしようにも手数が足りん。しかし拾って来たのはお主じゃろう？ それを恩義に感じてるそうじゃから、我等に無理難題は押し付けぬだらうて」

と言いながら戦闘員に命じて人質から引き抜いてきた哀れな女性の喉元を掴んで持ち上げる黒山羊首領。

顔で選ばれたのかは分からないが、目の前の生死に関係する脅威そのものに表情は歪み、充血した瞳からはとめどない涙が流れていた。猿ぐつわをされた口からは命乞いをしているのだろう、掠れた叫び声が漏れている。

黒山羊首領は女性の自己主張の類を意に介さず、鶏を絞めるように右手に精製した黒いビー玉を無造作に心臓へ突き刺した。

「——ッ!?!」

くぐもった悲鳴と共に突き刺された右胸から黒い葉脈に似たものが全身の肌には浮かび上がる。

「——オボオ——ッ!?!」

次の瞬間、女性の嗚咽と一緒に目、鼻、口、耳から噴水の如く真っ赤な血潮が飛び出した。

黒山羊首領が手を離しても、体の力を失った女性は直立状態で宙に浮いたままだ。

その足元からは体から植物の根に似た葉脈がコンクリート床にまで伸び、今しがた周囲に飛び散った血液だけでなく格納庫の床を赤黒く満たす血までドクドクと吸っている。

しばらく直立していた女性だが今度はカクンと顔を上に向ける。ゴボリとコールタールのようにねっとりとした黒い液体を口から吐き出した。ドロドロとした液体は頭から爪先までを覆い、端から硬質化していく。

数分後には白い血管が浮き出たような模様の赤黒いローブを纏った怪人神官と生まれ変わった。

頭からすっぽりとローブで覆われているが、顔の位置から覗く部位は馬の鼻先である。

馬怪人神官が黒山羊首領へ恭しく頭を垂れる仕草を、他の面々は恐怖と驚愕を顔へ貼り付けて見ていた。

数分前には自分たちの同僚だったのが、変わり果てた姿で敵方の支配下に置かれたのだ。無理もない。

「さて、次じゃ」

黒い玉を手の中で弄び、次の生け贄を選ぶ首領の視線に、人間たちは震え上がった。

◇

「あれ、もう終わったんですか？」

1時間以上経って椿櫻が格納庫に戻って来た頃には、神官3名と新たな怪人がその場に増えていた。

代わりにあれほど格納庫内を赤黒く染め上げていた血液は、綺麗さっぱりなくなっている。もちろん捕獲されていた人間も一人残らず消えていた。

「場を提供してくれて感謝するぞ嬢ちゃんや。お陰で神官だけでも揃えることが叶ったのじゃ」

「お役に立てて良かったです」

神官はどれも鼻先しか見えてはいないが、一番背が高いのが馬型。やや肩幅が太くてがっしりしているのが犀型^{サイ}。背の低いのが犬型である。彼等は椿櫻にも恭しく頭を下げると、首領の背後に控えた。

新しい怪人はがっしりとしたゴリラのような胴体に、マントヒヒとオランウータンの顔を前後に備えた首を持つ猿型の怪人だ。首領によると、長官と科学者とヒーローの死体まで利用した將軍候補であるらしい。

「どっころらしょ……と」

さすがに怪人神官を3人と、その協力のもと強怪人まで生み出したのには黒山羊首領にも堪えたようで。ふらついた首領を慌ててレイラレイラが支え、手近な台へ座らせる。

「どっころで嬢ちゃんはこれからどうするつもりじゃ？ ワシ等はここを借り拠点にもう数体怪人を増やす予定じゃが……。もちろん嬢

「ちやんが危惧するような過度な人間の殺傷は控えるがの」

「そうですね。だいたいの情報も得られたので西にある結社でも訪ねてみようかと思えます」

「どこからともなく取り出したタブレットに地図を表示させ、指でなぞりながら大陸の西側をズームアップする。」

「この基地にある情報が正しければ、今現在もあちらを拠点とする悪の秘密結社と青と銀のヒーローが攻防を繰り返しているらしい。」

「それだけ椿櫻が告げると、黒山羊首領は腕を組み「うむうむ」と頷いた。」

「あやつらか」

「あれ、お知り合いですか？」

「古い馴染みじやな。首領はお茶目じやが、部下は頭が固い。対応には注意せよ、と言いたいところじや。まあ嬢ちゃんなら問題ないじやろう。ついでにこれも持って行くがいい」

「と、椿櫻に投げ渡されたのは手のひらサイズの六角形の金属板。表面には六芒星に山羊の顔が刻まれている。」

「なんですかこれ？」

「ワシ等ミューガスのエンブレムじや。持っていけばあ奴等から無駄に警戒されることもないじやろうて」

「何から何まですみません」

「ペこりと頭を下げるとレイラレイラから動揺するような気配が伝わり、首を傾げた。」

「椿櫻は完全な善意でもってミューガスに手を貸している。しかし、むこうはそれでも椿櫻に疑心暗鬼を懸けざるを得ない。それ程までに実力差が有りすぎると分かったからだ。」

「何かあった時のため、助手をここに置いていきますね。私よりは数段レベル落ちしますが、あつちのポンコツを操るくらいはできますので、使ってください」

「椿櫻が壁に手を伸ばす仕草で背後に写った影より、ズルリと助手が姿を現す。」

「黒山羊首領が手が足りなくなると聞いたが、彼女の助手はコ

ピーなので無限に増殖が可能である。例え倒されたところで椿櫻には痛くも痒くもない。

山猫怪人と新たな猿型怪人に見送られ、屋外で影から椿櫻が喚び出したのは銀色の10mはあろうかという巨大甲虫であった。

「……っ!?!」

「大丈夫ですよ。噛みつきませんから」

差し出された前脚へひよいと乗り、二人の怪人に向かって「それはまたー」と手を振る。巨大銀色甲虫はふわりと音もなく浮き上がり、西へ向かって高速で飛んで行った。

4話 即身仏と一緒

日本を離れた椿ツバキサクラ櫻は大陸の方へ飛び立った。

ミューガスの首領からの話と調べた情報によると、大陸の奥地にある山脈の何処かに『結社』と呼ばれる秘密組織があるのだという。

その『結社』は霊峰が山という形を成したところから存在し、大陸制覇を掲げてもうずいぶん前から活動しているのだとか。

それがまだ達成されてもおらず、とっかかり状態のままなのは大陸に根を張る正義の組織の力が大きいのだろう。なにせその手の噂話が、ネットの掲示板でも噂話程度で止まっているからだ。

SSが掲載されたとしてもブレとボヤけが酷くて、補正をかけても何が映っているのか判明しないのが多い。周囲の建物からおおよその場所を割り出して、周辺の防犯カメラの映像を調べてみるが巧妙に隠されているとしか思えないのである。

その理由は疑わしき時間帯に何も映っていないところにあつた。

秀逸な編集により、何も無い日常が再現されていたのである。何処からか施された手によって。

勿論その痕跡も探ってみたが、途中で掻き消えていた。トカゲの尻尾切りのように。

「やれやれ、めんどくさい手を使うんだねー」

試しに現場に赴いてうろろしてみれば、警察が現れて椿櫻に職務質問をしてきた。

日中に学生服姿の女性が当てもなくうろついていれば、怪しむ者もいるだろう。

適当に「サボリです」と返してやれば、警察は彼女を拘束しようと手を出してきた。

勿論、逆にノシてやったが。

拷問に掛けて脳味噌から情報を吸い出してやれば、本当に善意の通報者から情報を得てやって来たようだ。ただ、周囲を監視下に置いていた彼女からすれば、それもおかしいことだ。

椿櫻がこの場に現れてから警官がやって来るまでの間、彼女を視認

できる範囲内にいた人間で警察へ通報した者は一人もいないからである。

周辺の監視カメラや視線など、全てを監視下に置いていたからこそ出来る芸当だが、盲点を一つだけ開けてあった。上からの視線だ。それも衛星軌道上からの。

その時間頭上にあった全ての人工衛星の情報を把握した椿櫻は、政府にも企業にも属さない一つの人工衛星をピックアップした。

巧妙に隠されてはいたが、その人工衛星を管理していた企業は実際に存在しない架空業者だったからだ。

管理元に気付かれぬよう、すぐにその人工衛星を掌握して監視情報を手に入れる。

今はまだ、架空業者側に気取られぬよう。大元から少しずつ情報を吸い出しながら、椿櫻は衛星から得た情報を元にその組織が関心に向けている場所へ跳ぶのであった。

その場所は都市部から離れた所にあった。

周囲に広がるのは無数のソーラーパネル。ソーラーパネルの畑のようにも見える一大発電施設だった。椿櫻の目的はそこで行われている戦闘にある。

正確に言うならば、鋼のスーツを着込んだ二人組と戦闘状態真つただ中にある怪人側だ。

無理やり龍脈の経路をこじ開けてその場に辿り着くと、鋼のスーツを着込んだ二人組が有象無象の戦闘員を粗方倒したところだった。

椿櫻はまず周辺の施設を掌握して、その全てを支配下に置く。ソーラーパネルを管理している施設の中央にそびえ立つ管理棟に、まだ職員が残っていた。人質に使えるかもしれないと、施設に職員がいる場所にロツクを掛けて逃がさないようにしておく。

それから目的地に向き直る。

戦闘員はひよろ長い人型で、全身にボロボロの包帯を巻いたミイラのような容姿であった。ほつれた包帯の隙間から覗く素肌は真っ黒で、塵の様なものが少しずつ流れ出ていた。

それらは地面に打ち倒されると包帯が解け、徐々に体表面が風化し

て崩れていく。塵が何処へ拡散するのかは分からないが、爆発するよりはまだ地球に優しそうだ。

そして正義を主張する鋼のスーツ、プロテクターを着込んだ二人組は緑色と黒色のシンボルカラーを持つ戦士であった。そちらの方は興味がないので放置である。

ただ邪魔をするならば容赦はしない。椿櫻の目的は戦闘の介入よりは、目標の『結社』とのコンタクトにあるからだ。

方や怪人は半分白骨化した馬の怪人であった。

体の半分は腐り落ちた肉のせいで骨が見えていて、残った肉体には戦闘員の者より上質な包帯で支えられているからか、まだマシな状態のように見える。

肩幅の広いがっしりとした肉体から伸びるのは半分骨の見える馬の首だ。

二人組と拮抗した近接戦闘を繰り広げる戦いの場へ、椿櫻は無雑作に歩みを進める。

当然戦っている三人も椿櫻の存在に気付き、どちらからかともなく戦闘を中止して距離を取った。

「おいおい、何だってこんなところに学生が……」

「この戦いを見ても動じた様子はないぞ、あの嬢ちゃん。何かの罠かもしれないし注意しろ！」

好き勝手に言っているが、仕掛けてこない限り椿櫻には敵意はない。仕掛けようと思った瞬間に二人組が相手にするのはスーツの方だろうが。

馬怪人の方は椿櫻が自分と距離を詰めようとしたところで我に返る。

場所は兎も角、普段なら逃げ惑う様子しか見せない女子学生が恐ろしく見えたからだ。

さっすといつでも戦闘できる態勢を整えたが、女子学生が馬怪人へ提示した物は全く思ってもみない物体であった。

それは首領に聞かされたことがある、東の国で活動するという秘密結社のエンブレムである。

五角形のプレートに五芒星と山羊の頭が描かれたエンブレムを名刺代わりに差し出した女子学生は「この関係者なんで、そちらの首領にお目通りを願いたい」という要求を申し出てきた。

さすがに一介の怪人に、怪しい人物を首領の元に連れていくということは判断できないため、つつい言葉荒げてしまう。

「お前のように怪しい奴を首領様に会わせることなどできぬ！ ……ヒヒイツ!？」

口にしてから言ったことを後悔した。

その女子学生、椿櫻がすさまじい怒気を纏い始めたからだ。しかもピンポイントで馬怪人の精神耐性を削る強烈な奴を。

この時、椿櫻は馬怪人に怒っていた訳ではない。『エンブレムを見せればあちらの組織とコンタクトが取れる筈じゃ』と言っていたミューガスの山羊首領に怒っていただけである。

「そう言えば、『部下は頭が固い』とか言っていたっけ？」

「……何か言ったか？」

「いえいえ、何でもありません。じゃあどうしよつかなあ」

呟いた言葉を聞きとがめられ、椿櫻は慌てて自分の口を閉じる。交渉とは言えない会話だったが、ここでとっかかりが途絶えてしまうのももつたいない。

うろついていた視線が未だに戸惑っている様子の二人組を捉えた。交渉材料が残っていることに感謝しよう。思わず口元に獰猛な、黒い笑みが浮かんでくる。

「それじゃあ、あの二人組を倒したら、首領に紹介してもらえないかしら？」

「なっ……!？」

馬怪人は、椿櫻が無雑作に指差した先の人物を見て瞠目する。緑と黒の戦士は自分をもつても倒しきれない敵と認識していたからだ。いきなりしゃしゃり出て来た子供かと思間違えるような女性に倒せる代物ではない。

だが椿櫻が返事も聞かずに二色の戦士に向き直ったことで、一考してもいいかと考えていた。倒せれば馬怪人たちの組織の有利となる。

倒せなければ最悪、馬怪人が捨て身の攻撃をお見舞いすればいいだけだ。少しでも疲弊していれば、馬怪人の勝てる確率も上がるだろう。

瞬時にそれだけの計算を立てた馬怪人。死霊結社バイアリーの怪人ホースパロスはその場に仁王立ちとなり、戦いの行方を見守ることにした。勿論第二ラウンドとかもなく、二人組の戦士があつさり蹴散らされてしまうとは、この時は想像もしていなかったが。

ホースパロスが後ろに下がったまま女子学生が前に出てきたことで、緑と黒の戦士の困惑はますます酷くなった。

椿櫻が何処からともなく取り出した扇子でビシッと指され、「さあ！ 何処からでも掛かってきなさい！」と宣言されたことで状況はさらにおかしくなっている。

どう見ても丸腰、しかも敵対理由もない。そのことを試しに告げると、相手は「それならこれでどう？」と五角形のエンブレムを取り出した。

「我こそは東国を支配する『秘密結社ミューガス』の外部協力員である！」

「ええ……」

「お嬢さん。君はあの怪人に脅されているんだ。その行為は君自身を危険に晒すだけではない。君の大事な両親や友人たちを巻き込む危険性をはらんでいる。ここで起こったことは忘れて、大人しく僕たちと一緒に帰ろう」

普通にいい人たちであった。

ただ椿櫻からすれば、今まで何を見ていたんだと憤慨するような状況だろう。

今まで馬怪人と親しげに話していた姿は見ていなかったのかと言いたい。

幾ら彼らでも東国の秘密結社の名前までは知らないため、椿櫻の口上にも半信半疑の対応を取らざるを得ない。

いくら椿櫻が悪ぶっても、敵対しようとしてくれない正義の戦士に対して苛立つ。明確な形でこちらが悪だと認めさせるために、分かりやすい行為で知らしめることにした。

自身の内の図書館^{ビブリア}より武器選択。実体化したそれを左手に顕現させる。

それは手っ取り早くどういう用途に使う物か分からせるため、明確な銃の形をしていた。知っている者は知っているが、そちら方面に造詣がない者でも銃だと断言できるだろう。

手っ取り早く言えばガン〇ムのビームライフルだ。

それを取り回しできる最大サイズで左手に出現させた。全長三メートル。ノンスケールにも程がある。

取り回しに不安を覚える大きさだが、機械であれば椿櫻の命令を従順に聞くために、引き金に指を掛ける必要などない。

緑と黒の戦士は唐突なノイズと共に出現した、ビームライフルの形状に息を呑む。そして銃口が向けられている方向にあるものが何なのかと確認して目を剥き、絶叫を轟かせた。

「や、やめろおおおおおっ!!」

銃口は正確にソーラーパネルの管理棟を捉えていたからだ。

不敵な笑みを湛えて戦士たちの方を見ながら、左腕一本で巨大な銃を構える女子学生。そんな姿を見せられてしまつては、緑と黒の戦士も椿櫻を敵と認めなくてはならなくなる。

「信じてくれましたか？ 私がちり側だということが」

「分かった。信じた。君と戦おう。だからその銃口は下ろしてくれ」

「彼らはこの戦いには関係ない筈だ。僕たちが君と戦う意志を見せればいいだろう！ 彼らは助けてくれ！」

椿櫻は首を傾け「どーしよっかなあ」と思案した様子を見せると、案の定彼らは少しずつ動きを見せる。片方は椿櫻の意識を逸らすため、片方は彼女から銃を奪うため。

「人にものを頼むにはそれなりの誠意が必要ではありません？」

彼らがギクリと固まり、ニヤニヤと笑う椿櫻を見て顔を見合わせ。こんなのに素直に反応するイイ人ぶりに少々落胆するしかない。

もつとがむしゃらに、誠意を見せるよりも突撃するべきだろうと呆れる。

素直に頭を下げようとする彼らに失望した椿櫻は「だが断る」と告

げて、ビームライフルを撃った。

銃口から飛び出したピンクのビームが一直線に管理棟を貫いて爆発する。

届かない手を伸ばして力なく項垂れる二人の戦士はさて置いて、椿櫻は史実通りの音が鳴って発射されたビームライフルに眉をしかめた。

「これだけ大きな音が鳴ると隠密には向かないわねえ」

「おまえええええええっ!!」

「何よ?」

「何故撃った!? 何故殺した! 彼らに死ぬ理由はなかったはずだ!」

「貴方たちがさっさと私と戦う態度を見せなかったからよ」

「お前が責任転嫁をするなああつ!」

絶叫をお供に突っ込んできた緑の戦士の攻撃をひらりと躲した椿櫻は、持っていたビームライフルを回転しながら緑の戦士に叩きつけた。

緑の戦士はその攻撃を避ける様子も見せず、無防備な体の側面で受け、くの字に折れ曲がってバッドで打ったボールのように数十メートルも吹き飛んでいく。

普段の彼であれば防ぐか避けるかの選択が容易な攻撃だっただろう。だが彼の意思に反し、彼らの着用するプロテクターの動きは阻害されていたが。

「なっ!? ライノス!」

「ふーん。あつちはライノスって言うんだ。キミは何かな?」

「!?」
滑るように懐に入り込めば黒の戦士から驚愕した感情が漏れ伝わってくる。

大地を踏み抜き、震脚をも加わった威力で振るわれたビームライフルの銃口が、黒の戦士をアッパーカットで上空に吹き飛ばす。

きりもみして落ちてきた黒の戦士は、立ち上がるうとしてあがいていた緑の戦士の前に落下して、苦痛の声を漏らす。

「バイソン!？」

「ふむ。あつちが牛でこつちが犀サイか。動物シリーズ？」

「クツ、なんだこれは……? 体が重い？」

ひらりふわりとスカートをはためかせ、椿櫻はビームライフルを二人の戦士に向け即座に撃った。あわや命中というところで体を回転させ、みつともなく地面を転がって致命傷を避ける二人。

だが、地面に突き刺さったビームの着弾点が爆発したため、二人とも爆風で吹き飛ばされる。

空中で成す術もなく爆風に翻弄されるライノスと呼ばれた戦士に對して、椿櫻は碌に照準を定めずに立て続けに撃ち込む。

落下予測を計算して、などという面倒なことはしなくていい。椿櫻が当てると言うのだから、ビームライフルはその要請に応えるだけである。

ビームの軌道が途中で折れ曲がり、群れで狩りをする狼のようにライノスへと襲い掛かる。

一発はライノスの右腕を肩から喰い千切り、一発はライノスの左足を膝から喰い千切る。

更に一発はライノスの腹を喰い破り、最後の一発はライノスの頭を消し飛ばした。

胴体に穴の開いた頭なし片腕なし片足なしの物言わぬ亡骸が、断末魔を上げる暇もなく落下した。

爆風に翻弄されながらも態勢を整え、なんとか立ち上がったパイソンはその亡骸を見て絶句する。

「ら、ライノス！」

足取りもおぼつかないままライノスの亡骸に近付こうとしたパイソンは、不意に轟いた音に即座に身を翻ひるがえしピンクのビームから逃れた。

顔を上げればパイソンに向ける銃口の向こうに無表情な椿櫻の顔がある。

「どうやら亡骸を抱え感傷に浸る間さえ与えてくれないらしい。

「この魔女が！」

苦し紛れに放った侮蔑の言葉が、彼のこの世で最後の言葉となった。黒の戦士パイソンの胸を容赦なくビームが貫き、亡骸となったその身は大地に崩れ落ちる。

「感傷パートなんかいらないのよ」

椿櫻はそう言い放つと、ビームライフルを後ろに投げ捨てる。

彼女の手を離れた武装は瞬時に原子分解を起こし、一欠けらも残さず消えていった。

無表情から一転して、外交用の笑顔を張り付けると、椿櫻はホースパロスに向き直る。なにやら動揺している怪人に向かってにっこり微笑む。

「これで貴方たちの結社に案内してくれるでしょうか？」

「……………分かった。ついてくるがいい」

少しの間はあつたがホースパロスはくるりと身を翻すと、先導するように歩き始めた。

漸く二つ目だよ、と思いつつも椿櫻はその後を追う。

大地に転がる二つの亡骸は、もちろん椿櫻も怪人も一瞥いちべつすることもなかったのである。